

事例5 「です」「ます」調で会話することがあるE男(小学6年生)

欠席等の様子

1年 20日
2年 9日
3年 11日
4年 18日
5年 24日 2学期末から保健室に登校した。
6年 28日 4月から、ほぼ毎日保健室に登校した。

学習の様子

[実技教科]
体育 器械運動、跳ぶ運動、ボール操作、スキップ等が苦手で、特にゲーム参加に消極的である。
音楽 リコーダーの演奏、特に他のパートと協調した合奏や合唱に参加しにくい。
[その他] 実技教科以外の学習は、一斉指導では困難だが、個別指導では課題に向かおうとする。

性格や行動の様子・エピソードなど

(1年)4月、母親恋しさから毎日泣いた。一人で席にいることが多く、友達とのかかわりを拒んだ。ルールのある遊びができなかった。

(2年)手、指、体の動きがぎこちなく、指示に従いゆっくり活動した。

(3年)課題を仕上げるのに時間がかかった。給食当番で、最後まで役割を果たせることもあった。パターン化された行動には迷わないが、判断が求められる場面は回避した。

(4年)特定の友だちがなく、集団とはかかわりにくかった。

(5年)自分の世界にいることが多く、独り言や一人笑いも見られた。

自他が未分化で、他人が叱責されているのに泣いたり、他人が話しかけられているのに応答したりした。

(6年)会話が、学校だけでなく家庭でも「です」「ます」調である。

児童の理解

自他の未分化によるコミュニケーション能力の低さや、集団とのかかわりが困難であることから、幼児期の二者関係の形成が不十分であると考えられるが、独り言や一人笑い、「です」「ます」調の会話等から、情緒障害も推測される。

低学年から集団不適応傾向にあったが、5年生という前思春期になって他の児童とのギャップの拡大とともにそれがさらに強まり、保健室登校に至ったと考えられる。

援助・指導の方針

- 1 保健室で個別指導を実施し、学習困難の改善・克服を図る。自己表現力を育成し、対人関係能力を促進する。
- 2 小集団で、関心・意欲のある題材を扱った実習を行い、自信と達成感をもたせる。参加可能な学級活動を通して、社会性を育成する。
- 3 E男の課題の理解を促すため、家庭との連携を図る。

援助・指導例と経過 ----- 主な担当者 担任、養護教諭 -----

保健室登校開始(5年12月)	・担任の叱責が級友に対するものであったにもかかわらず腹痛を訴え、保健室へ行く。翌日から保健室に登校した。
保護者面談	・保健室での学習を認めつつ可能な限り学級の授業へ行かせた。(保護者の成績に関する不安の軽減を図る。) ・授業には入れなかったが、給食と終わりの会は、学級に参加した。 ・2カ月後、保健室来室者に「どうしました?」と声かけができた。
6年当初	・登校後、一旦学級へ行き、学習用具を持って保健室へ来た。クラスメート全員が下校した後、カバンを教室へ取りに行き、一人で下校した。 ・来室児童にはかかわろうとするが、休み時間は、来室するクラスメートを避け、運動場をぶらついた。
個別的な援助・指導	・翌日の学習計画を教師と一緒に立案する。(スケジュールの自己決定) ・運動不得手なE男の抵抗感が少ない風船バレーで遊ぶ。準備や片付け等でも一対一のコミュニケーションを図った。(運動促進とコミュニケーション能力の育成) ・E男が興味をもって主体的に参加できそうなホットケーキづくりや、ゲームを、保健室登校の同学年児童を交えて実施した。(社会性の育成)
家庭との連携	・パターン化された行動以外の体験の場を家庭で積極的につくっていくことを話し合う。 買い物等、両親との外出機会を増やす。(具体的内容の提示) ・E男への家庭での具体的なかかわり方を話し合い、保護者のE男理解が深まる。
E男の活動の広がり	・体育大会団体演技の練習に参加し、当日は部分的に参加した。 ・活動をともにした保健室登校の同年齢女子児童の登校を心待ちにする。 ・卒業式(練習も)、学級お別れ会等の行事や活動にも嫌がらずに参加した。

変化と課題

1 変化

学習 個別指導の積み重ねにより、計算、家庭や図工の実技に興味を示すようになり、学習に対する意欲と自信が見られるようになってきた。また、自分の世界にいる時間も減少し、自分のしたいことを意思表示できるようになった。

対人関係 コミュニケーションが、同学年の別室登校女子児童とのかかわりによって少し広がった。また、大きな集団活動への参加も、行事を節に可能になってきた。

家庭 保健室登校開始時の保護者の不安は和らいだ。また、休日には、外に出たがらなかったE男と、買い物に出かけたりするようになった。

2 課題

対人関係が未成熟なE男に対する、他の生徒の理解を促進する。

長期的な見通しと中学校との連携を踏まえた援助・指導を図る。

考 察

前思春期に集団不適応を強めたE男に対する、保健室を中心とした早期の個別的なかかわりと小集団活動へのゆるやかな参加で、家庭への引きこもりを防いだ事例である。

E男は今 中学校では登校しぶりにはなっていないが、学習課題への個別的な対応が、さらに必要になったため、2年生から障害児学級に入級している。